

看護学生の災害救護訓練参加による学習計画とその結果

～日赤第一ブロック支部合同災害救護訓練参加の実際～

山本捷子¹⁾ 奥山朝子²⁾

The Participation Planning and Result of Nurse Students in the Disaster Relief Training of the First Block Chapter Japanese Red Cross Society

Shoko YAMAMOTO Asako OKUYAMA

要旨：平成11年度の日本赤十字社第一ブロック支部合同災害救護訓練に、本学看護学科2年生が参加したので、その概要を述べ、学習の結果を事後の意識調査にもとづいた評価考察したので報告する。

北海道・東北各支部の11救護班による大規模な救護訓練に際し、学生は模擬傷病者や運搬要員として参加し、災害時の被災者の心理、災害時のボランティアとしての運搬要員の困難さ、救護班員に求められる態度について、大きな学びを得た。特殊メイクや迫真の演技は臨場感を高め、その中での体験学習は災害看護の理解に大きな効果をもたらした。

キーワード：日本赤十字社の災害救護、災害救護訓練、災害看護の教育

Summary : Nurse students participated in the disaster relief training that was planned and managed by the First Block Chapter of Japanese Red Cross Society.

In the realistic disaster training, nurse students played a role of patients, and the transportation service. They practiced conveying many "patients" to the medical tents. They have learned much about the mentality of disaster-stricken patients, and the importance of the relief squad. We have found the students' participation in the disaster relief training much effective in their understanding the disaster relief activities.

Keywords : disaster relief activities of Japanese Red Cross Society

disaster relief training

disaster nursing

はじめに

日本赤十字秋田短期大学（以下「本学」という）の建学理念は赤十字の理念「人道」に基づくが、それはすなわち、看護と介護の分野で「人道を実践する人材」の育成をめざした教育である。

災害救護は「人道」という赤十字の理念を具現化するひとつの活動である。

平成11年度日本赤十字社第一ブロック支部合同災害救護訓練は秋田県支部が担当した。その際本学の学生の参加協力の要請があったため、看護学科2年次生が参加した。本稿では、学生の参加学

習の計画と実際の概要を紹介し、学生の事後調査にもとづいて結果評価を述べる。調査結果を報告することは学生の理解を得ている。

I. 企画・準備

日赤秋田県支部の「学生80名参加」の要請を受けて、特別教育計画として教務委員会が企画担当することになった。平成11年度の学年暦が決定した後に、支部の企画が明きらかにされたため、10月6～8日に参加できる看護学科2年次生が参加することになった。参加の準備として、先行学習

としては1年次の「赤十字概論」の他は、2年次前期に成人看護学の一環として「蘇生法」と「赤十字救急法」の学習予定があったため、9月30日と10月1日に事前学習を組み入れて、計画した。

秋田県支部の救護訓練企画実行委員会に教務委員長である筆者（山本）と事務部総務課長が出席し、訓練全体における学生の行動を確認しながら準備を進めた。4月のガイダンスの際に学生には、実施を予告し、夏期休暇前に必要物品の準備を伝達した。

II. 災害救護訓練参加の概要

1. 学習の目的・目標を次のように設定した。

- (1) 日本赤十字社の災害救護訓練の実際を知り、日赤の果たす役割機能を理解する。
- (2) 模擬傷病者を体験することにより、被災者の傷害の種類、心理状況を理解するとともに救護（看護）者としての態度を学ぶ。
- (3) 災害ボランティアの果たす役割、ボランティアに必要な知識・技術・態度を理解する。

2. 日程：平成11年10月6日（水）7日（木）

3. 会場：秋田県立中央公園（川辺郡雄和町）

4. 当日の行動計画（別紙 表1参照）

5. 学生の役割；模擬傷病者・家族、飛び込み型防災ボランティア、その他の援助

6. 宿泊：県営トレーニングセンター宿泊棟

7. 学生の服装・持参品について

- (1) 仮想傷病者用衣服（古着）持参
- (2) 当日の服装：長袖・長ズボンの運動着、運動靴、帽子
- (3) 持参品；
 - ① ナップザック（身につけられる小バッグ）
筆記用具（実施要項・メモ・ペン）
防寒防水の服（ウインドヤッケなど）、
飲物（水）・非常食、軍手、懐中電灯、
タオル、三角巾・ロープ、必要最低限の
金銭
 - ② 宿泊用必要物品：洗面道具・着替え・寝着

III. 事前学習

次のように事前学習計画を9月始めに掲示し、予定通り実施した。

(1) 9月30日9：00～12：00

オリエンテーション（救護訓練の日程と役割）
：山本捷子教務委員長
特別講義「災害看護論」：村上照子助教授

(2) 9月30日13：00～15：00

担架運搬法演習：佐々木芳明氏（日赤秋田支部業務推進課長）・藤田康雄医師（秋田赤十字病院救急部長）・支部の指導員・短大看護教員

(3) 10月1日9：00～12：00

- ① 「模擬傷病者の役割と演技」：日本メディコ
- ② VTR「災害救護訓練の実際」
- ③ 特殊メイキャップ・衣服の打ち合わせ

結果として、出席した者はオリエンテーションと村上助教授の特別講義に65名、午後の担架運搬演習には40名で、出席率はよくなかった。その理由は、9月以後の授業日程が前期試験・基礎看護学Ⅱ期実習2週間の後で、秋季休業中のためであると考えられた。欠席者に対しては、訓練前々日にオリエンテーションと前日に担架演習を再度実施したが、参加意欲は低調であった。

IV. 訓練の実際

日赤第一ブロック支部合同救護訓練は、各支部救護班（北海道・青森・岩手・山形・福島は各1箇班、宮城2、秋田3箇班）の合計102名、統監部10名、地域ボランティア169名、学生71名、運営スタッフ22名が参加した大規模な訓練であった。本学からは、統監部に学長と事務部長、運営スタッフとして事務部3名、教員2名（教務委員会メンバーの山本と奥山）が参加した。教員は主に学生指導を担当した。

救護訓練の主な内容は、緊急通信、救護所設営、傷病者の収容・処置・搬送、傷病者の空輸、防災ボランティアの受け入れ訓練などで、救護班は自己完結型で野営訓練も行われた。

6日の訓練Ⅰは、河辺町戸島ふるさとセンター、雄和町農村環境改善センター、雄和町コミュニティセンター長者やま荘に分かれ、各所に集結した救護班と後続救援の救護班との連携訓練が行われた。各所に23～24名の学生を配置し、午前中に救護所設営と訓練に必要な模擬傷病者の特殊メイキャップの準備をし、午後は河辺町・雄和町の住民ボランティア20名と一緒に模擬傷病者・家族ならびに運搬要員として、行動した。

訓練Ⅱは、夜間19時～20時に中央公園スカイドーム前において行われ、学生Aグループ（36名）は模擬傷病者・家族、Bグループ（35名）は運搬要員・飛び込み型ボランティアを担当した。

表1 日赤秋田短期大学生の行動計画

日 時	訓練スケジュール	学生Aグループ No1～40	学生Bグループ No41～80
10月6日			
9:00	短大前出発	No1-26 (山本) ; マイクロバスで、救護所①へ行く No55-80 (奥山) ; 中央交通バスで、救護所③で下車 No27-54 (菅原) ; 中央交通バスで、救護所②へ行く	
10:00	救護所設営 ①戸島ふるさとセンター ②雄和町農村環境改善センター ③雄和町北部コミュニティーセンター長者やま荘	各救護所で 仮想患者5名; メイキナップし、待機する。 家族役 5名; 患者と共に 運搬要員16名;	
	昼食 (弁当)	弁当を本部より運搬①; 田村、②③; 南部・山岡 弁当が配布され次第昼食をとる。	
13:00	救護訓練Ⅰ開始	各救護所で 患者・家族役はスタッフの指示に従い、救護所へ 運搬要員は、必要に応じて患者を運ぶ。	
15:00	救護訓練Ⅰ終了	救護所撤収・メイク落し・会場点検などが終り次第、 ①③はマイクロバスで、②は乗用車で本会場に帰着。 夕食 (トレーニングセンター食堂でとる)	
15:30			
17:00			
17:45		仮想患者・家族 着替えメイキナップし、所定の場所 で待機する。 指示にしたがって 救護所へ。 (佐藤正・奥山)	防災ボランティア 運搬用具を調達。 20名は患者運搬。 19名は飛び込型ボ ランティアとして V本部に押しかけ、 V L指示に従い行 動 (山本)
18:30			
19:00	救護訓練Ⅱ開始 (夜間訓練)		
20:00	訓練Ⅰ終了	トレーニングセンターへ帰る。 宿泊 (*部屋割り)	
10月7日			
7:00		トレーニングセンター食堂にて朝食	
8:00	仮想患者集合		
9:00	奉仕団集合 救護訓練Ⅲ開始 (ヘリ輸送など)	防災ボランティア 救護活動の援助 (搬送) をする (富野・伊嶋)	仮想患者・家族 メイキナップし所 定の場所で待機。 仮想患者・家族役 を2回繰り返す。 (山本・奥山)
11:45	救護訓練Ⅲ終了		
12:00	昼食	救護テント撤収・後片づけ 昼食 (炊き出しご飯とレトルト食品) 全体会・職種別反省会の会場設営の援助	メイク落し・後片づけ
13:00	学生帰校	中央交通バスとマイクロバスで短大へ帰着、解散 事後調査用紙配布 (引率; 奥山)	

訓練Ⅲは、10月7日スカイドーム前において、9時から12時まで、前半は救護A班（秋田1・宮城1・北海道・山形・福島）の訓練、後半はB班（秋田2・青森・岩手・宮城2）の訓練が行われた。学生は役割を前日と交替し、Aグループ36名は搬送要員、Bグループ35名は地域住民ボランティア20名と一緒に模擬傷病者・家族役割を演じた。2日目は訓練統監部（支部事務局長・病院長など）や県消防関係者、地域住民など多くの人々が見学する前で、一生懸命に担架搬送を繰り返した。学生は、日本メディコによる特殊メイクを施し感情移入して傷病者に成りきって演技した。熱心に泣き叫ぶ迫真の演技の結果、ついに二人の学生が、手がしびれて頭痛・吐き気をもよおす「過換気症候群」を発症して、実際に救急車に収容されて応急処置されるほどであった。

学生の真に迫る傷病者演技と運搬要員の行動は、訓練をいっそう臨場感あふれるものにし、救護訓練の効果を上げることに大いに貢献したと実施関係者から絶大な称賛を受けた。また、熱心な活動は見守る観衆の感動をよび、日赤秋田短大の存在をアピールした。

一方、訓練以外でも、訓練の準備や後片づけ、宿泊所の食事場面などで、積極的・自主的に、また黙々とボランティアな行動をする多数の学生の姿が見られた。教室を離れた集団生活の中でボランティア精神が発揮されることを再認識できことは、望外の喜びであった。

V. 参加学生の反応結果と評価

参加学生の反応を捉えるために事後調査を行った。その結果に若干の考察を加えて評価する。

調査内容は、特別講義の内容、訓練参加の成果、傷病者役割・運搬要員・防災ボランティア体験からの学びと困難、災害救護の授業の必要性について、感想を自由記述で求めた。事後調査用紙は、訓練終了直後の帰校のバスの中で配布し、翌日学校で回収した。回答数45で回収率は参加者（71名）のうちの65%であった。

1. 特別講義について

村上助教授による講義については、授業に出席した者（65名）の内35名が回答している。特に興味関心をもった3項目を記述した結果を分類すると以下の通りである。（表2参照）

最も多いのは「トリアージ／トリアージタッグ」

であった。これは救護訓練でトリアージという行為を受け、トリアージタッグを付けられたことも印象を強化したと考えられる。

2番目は「日赤災害救護一般・国際性」であり、「国際救援のスライド」は、村上助教授がカンボジア難民救護（カオイダン）における活動体験談とスライドによって実際場面を紹介したことが印象深かったようである。

さらに「日赤救護活動の歴史」、「災害時特有の傷病と処置ケア」「災害看護の特殊性」「救護班の編成」などであった。また午後の担架運搬法と2日目の「特殊メイク」も印象に残り、動機づけになっている。

この結果は、事前学習目標として期待した通りで、成果があったと評価できる。

表2 講義で関心・興味のある内容

①トリアージ／トリアージタッグ	25
②日赤災害救護一般・国際性	20
③国際援助のスライド	16
④日赤救護活動の歴史	11
⑤災害時特有の傷病と処置ケア	10
⑥災害看護の特殊性	7
⑦救護班の編成	4
⑧本学教員の救護活動	2

n : 35 (複数回答)

2. 訓練参加の意義について

参加したことは「大変よかった」が30名、「よかった」が15名、「よくなかった」は0で回答者は参加の意義を認めている。

参加の意義を認めた「参加してよかった理由」の自由記述を分類すると（表3参照）、最も多かったのは「リアルな体験」で、実際的な擬似体験によって災害時の混乱状況を実感し、救護を学習した。

2番目は「被災者の心理がわかった」では、役割演技によって傷病者の不安や悲しさ・つらさを体験したことを挙げている。

次いで「実際の時役立つ体験であった」では、具体的に担架運搬法、救護活動の実際（救護所の作り方、救護の流れや状況、トリアージの実際、応急手当の方法、救護員の活動）を学んでおり、大きな学習成果である。

また「救護員・運搬要員の役割、言葉づかい・態度」は、患者側から見た救護者の資質を学ぶ機会となったと言える。

さらに「自分も赤十字の一員であるという満足

感・日赤短大生という誇りの実感」、「自分の未熟さ・焦り・判断の遅さを実感」あるいは「婦長さんの優しさ、地域の人々とふれあえた」など、期待以上の感動を経験していることがわかった。

総体的に、この訓練参加の目標は達成されたとと言える。

表3 訓練に参加してよかった理由

①リアルな体験だった	17
②被災者の心理がわかった	15
③実際の時役立つ体験	13
④運搬要員の役割や心理がわかった	7
⑤実際の時に役立つ体験	2
⑥赤十字の一員・日赤短大生の実感	2
⑦婦長・地域の人々とのふれあい	2

n:30 (複数回答)

3. 傷病者役割から学んだ「傷病者の心理」

「傷病者の心理について、学んだこと・困難だったこと」から、具体的な学習内容を分類すると、次のようにまとめられる。(表4参照)

- ①身体的苦痛だけでなく精神的な不安・恐怖が強くなる。特に混乱の中では痛みも増強する。
- ②救出・治療されるまでの時間が長く感じられ、苦痛と不安が強くなる。特に一人の時の心細さ。
- ③誰でもが「我先に」と自分中心的になり、そのためパニック・混乱状態になる。
- ④軽症者や外見上ケガのない傷病者は取り残される不安が強い。
- ⑤搬送される時の担架が揺れるとき苦痛。
- ⑥重症者は訴えができず取り残される不安が強い。
- ⑦たらい回しや後回しにされるとき不安・不満
- ⑧不安が強いと他人の言動や状況に対して敏感になり、医療者への不満・批判が増強する。
- ⑨不安が強い反面、家族やボランティアが付き添うと安心する。

これらは、日本メディコスタッフのファシリテーターと、特殊メイクを施して傷病者になりきった学

表4 「傷病者の心理」として学んだこと

身体的苦痛と同時に精神的不安が強い	24
収容・治療までの時間の長さや不安	12
誰でも自分中心になりパニックになる	8
軽症者は取り残される不安。	8
担架が揺れると痛い・苦痛・不快。	4
重症者は訴えができない不安。	3
たらい回し・後回しにされるとき不安	3
感情敏感、医療者への不満批判が増強	2

n:45 (複数回答)

生の努力と実感からの学びである。

4. 運搬要員・防災ボランティア体験からの学び

斜面や階段のある災害現場から、学生4人で担架を用いた担送と歩ける傷病者の護送にあたり、救護テントまで200メートル以上を何回も往復して運んだ。それは最も辛い活動であったためにほとんど全員が、その難しさ、大変さを述べている。実感した困難さと努力したことを整理すると、以下のようにまとめられる。(表5参照)

- ①運搬要員に必要なものは体力・忍耐力・持久力。
- ②1人でも多く早く救出するには、冷静に優先順位を判断する能力が必要。
- ③傷病者を落ち着かせることばや態度が大切。
- ④安全に運ぶ。その為には担架搬送の基本を生かした運び方が大事。

つまり、救急場面における観察・判断力、対象への心理的配慮、安全効率的な技術という看護実践能力を、その為には看護者には理性・人間性・体力(健康)が求められるということを学びとっていると言える。

表5 運搬に関する学び

1. 運搬要員として必要なこと	
体力・忍耐・持久力・体力調整が必要	30
焦らないで、優先順位を考慮する	19
安全に、観察しながら、早く運搬する	14
声かけ、手を握って、安心させる	2
多くの運搬要員・調整者が必要	2
搬送者同士のかけ声・協力が大事	1
2. 救出時に必要なこと	
優先順位・トリアージが大事	19
パニック状態の人に対する接し方	8
雰囲気にもまれ混乱状態にならない	4
不安や大変さを顔や態度に出さない	1
「待ってください」は不安を与える	1
三角巾を使って応急処置する	1
3. 担架の使い方	
基本を生かした正しい運び方をする。	6
安全・足並み揃えて運ぶ	1
斜面でも安全・効率的に運ぶ。	1
担架の練習が必要	1

5. 救護班に関する学び

傷病者役割と運搬要員の両方を体験しているため、救護所における救護班員(医師・看護婦・主事)の対応について、学生は多くの感想を記述している。好ましい対応をした救護班からは直接的なモデルを学習しているが、批判的な記述(22件)を「救護班員として望まれる言動・態度」にまと

めてみると、

- ①待たせないこと。
- ②混雑の中でも医師の正確な判断（トリアージ）は信頼の源泉。
- ③どの傷病者・ボランティアにも平等に接し、丁寧な対処をする。
- ④笑ったり、「静かに」など、傷病者を軽んじない。
- ⑤声をあげない重症者ほど早く対処する。
- ⑥不安軽減のためには細かい説明が必要。
- ⑦手を握ったり、目を見たり、元気づけることは掛けることが大事。
- ⑧大げさでも優しいことばをかける。
- ⑨死亡者の家族には付き添いが必要。

このように傷病者や家族の不安な心理をもとに、救護者に期待することばや態度を表現している。「ボランティアよりも知識のある人に声をかけられる方が安心」という記述もあるように、これらの言動や態度は、専門知識をもった看護者として自らの努力目標としてほしいことである。

救護所の設置については、運搬の際の障害物として捉えるにとどまり、また救護班員の役割・能力について記述している者はほとんどいなかった。物品の整理整頓、トリアージとその後の処置技術など、救護所内の活動の重要性については、卒業後の救護班員の訓練で学習する必要があるだろう。

6. 災害救護の授業の必要性

日赤看護教育に災害救護に関する授業（演習を含む）が必要か否かの質問に対して、必要と「思う」が42名、「思わない」が2名、NA1名であった。必要とする理由を分類すると、「赤十字・日赤の教育機関として」が最も多く、「個人、ボランティア」「医療者・看護婦として知っておくべき」と災害救護に関わる者の立場から必要性を述べている。

その他の多くは、災害看護の理解のため、傷病者や救護班・ボランティアの心理が理解できるといふ体験学習の効果の面から必要性を述べている。また、自己の技術や対応の不十分さを実感し、日常の看護の学習への振り返りとなるという副次的効果も示唆している。

必要と思わない学生は、「本学での最終目標は看護婦国家試験合格であるから」と言う一方で「単なる“おもしろい演習”に終わるから」と述べていることは、演習のしかたや「災害看護の学

習」の動機づけが必要であることを示唆している。

VI 考察

1) 災害救護訓練参加の意義と問題

参加学生の訓練時の実態や事後調査の結果から訓練参加の目的目標は達成できたと評価できる。

しかるに、この調査に回答した学生は、事前学習の段階から意欲をもって取り組んでいたが、一方半数の学生は担架搬送演習に参加せず、また当日は7名の不参加があり、「自由参加であって、義務ではない」という認識をしている学生もいた。このような意欲の低調さや動機づけの弱さは本学の教育上の問題だと考える。

学生の本学の入学動機には「赤十字だから」が高率を占めていた¹⁾。せっかく意欲をもって入学してきても、「赤十字に対する関心」は徐々に薄れ、1期生の卒業時には「赤十字」に関する重要な知識は定着していないということが、別の研究²⁾でも明らかにされた。

看護学科の赤十字関連科目は「赤十字概論」だけである。赤十字教育ならびに赤十字と看護を結びつけるカリキュラムや教育方法、特別教育計画や課外活動の指導など検討する必要があるのではないだろうか。

教員の中には国内外の災害救護に派遣されたり、訓練の参加経験者もいるので、次年度から特別教育計画としてでも企画し、学生の赤十字に関する興味関心を強化すべきではないだろうか。

2) カリキュラムの問題

この災害救護訓練参加は、日赤支部の企画に乗り合わせた教育活動であった。開学3年目に行われたカリキュラムに関する看護教員の意見聴取では、現行カリキュラムには赤十字の特色を教育する科目や教育計画が少ないという意見が多かった。

今年度入学の4期生からは、選択科目として災害看護論（1単位・15時間、選択）を設定したが、それは偶々開学時に設定した科目の担当者が得られないという現実対応の結果である。

このように偶然の機会にあわせた教育計画では、学生への動機づけも、教員の指導計画もおろそかになりがちで、充実した成果は望めない。

ちなみに日赤武蔵野短期大学では、災害救護論（60時間2単位）、災害救護実習（35時間、0.5単位）は実習ローテーションに組み入れる教育をおこない、その成果は、学生に赤十字に対する意識

づけを高めている³⁾という。

また、日赤系病院では全職員が災害救護の研修教育を課せられているが、日赤系の教育機関卒業生は対象から除外されている。その為にも、日赤系の本学でも災害救護を学習した卒業生を送り出すことは当然期待されることである。

長期的展望に立ち、本学の教育目標達成と卒業後発展していく学生を育てるためにも、カリキュラムに赤十字の特色を出す科目を設定し、適切な教育内容と方法を計画的に展開すべきであると考える。

3) 指導教員の育成

今回、企画実施の段階では学生の意欲だけでなく、教職員の関心の低調さを実感した。事前学習に関心をもって参加した教員はわずか4名であった。教職員は、学生の学習行動に関心を寄せるとともに、災害看護や赤十字関連の活動に関して、もっと関心を持つことが、本学が私学として赤十字教育という「個性ある短大」になるための近道であろう。

今後行われる日赤支部の災害救護訓練を見学したり、日本赤十字社などで行われる研修会に参加するなど、災害看護学を教授指導する教員を育成することが肝要だと考える。

4) 救護訓練企画上の問題

運搬要員が本学学生だけであったため、学生の体力の消耗が激しかったことや、夜間の訓練は寒くて具合が悪くなったことなどは、人数配分や企画に原因があった問題であった。また訓練中の救護班員やボランティアリーダーの中に、学生の真剣さに対する不適切な対応をする人が存在したことなどは学生の意欲を低下させたが、これらは企画担当者との合同評価に生かし、改善したい。

終わりに

平成11年度の日赤第一ブロック支部合同災害救護訓練に参加の機会を与えられ、参加した学生は大きな学習成果を上げた。また、本学の赤十字教育の弱点を明確にする機会となった。

隣接する秋田赤十字病院と提携協力する方法もあるだろうし、日赤秋田県支部の救急法のベテラン指導者の協力を得て、さらに災害救護に関する教育が充実されることを期待したい。

災害救護に対応できる力量を持つことは医療従

事者としては当然期待されることであり、赤十字の使命を果たす人材を育成するという本学の教育方針を実現化させたいものである。

【引用・参考文献】

- 1) 酒井志保他：看護学生の受験理由と看護学科選択理由に関する実態，日本赤十字秋田短期大学紀要第1号，p.85，1996.
- 2) 山口貴美子・山本捷子・村上照子：日本赤十字災害看護学の確立をめざして（第2報）～日赤系短期大学生の赤十字に関する認識の実態，日本赤十字秋田短期大学紀要第4号
- 3) 小原真理子：災害看護教育の実践報告1～学生の反応～，日本災害看護学会誌，vol.1，No.2，1999.
- 4) 山本捷子：実践報告－災害看護演習－その実践結果と考察，日本赤十字中央女子短期大学研究紀要第5号，pp.56-68，1984.
- 5) 日本赤十字社救護課編：救護班要員マニュアル，1992年版
- 6) 金井悦子・山本捷子：21世紀の日本赤十字看護教育への提言－災害看護学の確立へ向けて，日本赤十字武蔵野短期大学紀要第10号，pp.25-33，1997.